

現代学生の気質

— SIV からみた変化と専攻別の特徴 —

平松 芳樹

Yoshiki Hiramatsu

問 題

筆者が昨年調査したところでは、十数年前の学生と現代の学生との気質には次のような変化がみられたことを、本紀要第16号で報告した（平松，1985）。

1. 現代の学生の性格傾向は、外向型の者が増え、内向型の者が減少してきている。
2. 気楽な人間関係の中で個人的なゆとりを楽しむ生活を求め、割り切った合理的な生き方を求める傾向が強くなってきている。

これらの変化は、MPI 性格検査とライフスタイルの調査からとらえたものであるが、本稿では対人関係価値の観点からとらえてみる。筆者はかつて短大生の志望専攻別の対人関係価値の比較を試みている（平松，1971，1972）。そこで今回はこの同じ尺度で得られた現代学生のデータを加えて比較検討する。本研究の第1の目的は、学生気質の時代的变化をあきらかにすることにある。そして第2の目的は、いくつかの志望専攻を異にする学生グループの特徴をとらえることにある。

方 法

1 対象 中国短期大学学生 1年次生294名（家政科家政専攻47名，同科食物栄養専攻80名，保育科94名，英文科42名，音楽科31名），および2年次生113名（保育科のみ）。

比較グループとして，1971年調査の292名のデータを用いた。（家政34名，食物栄養105名，保育75名，英文24名，音楽54名。ただし食物栄養に2年次生が一部入っているが他は1年次生である。）

2 調査年月 1985年7月～12月

3 測定尺度 KG-SIV（菊池・ゴードン対人関係価値尺度）：この尺度は，支持 support，同調 conformity，承認 recognition，独立 independence，博愛 benevolence，指導 leadership の6つの価値から構成されていて，各価値の中の相対的な重みづけが測定できるように考案されている。それぞれの価値の意味を簡単に示すと次の通りである。

S（支持）：他の人々から理解を持って扱われ，勇気づけられる。親切や思いやりをもって扱われる。

C（同調）：きちんと規則に従い，社会的に当を得た行動をする。他の人々から受け入れられる妥当な行動をする。

R（承認）：他の人々から尊敬され，賞讃され，重要な存在として考えられる。他の人々の好ましい注意をひき，承認をうける。

I (独立)：自分の思うように行動する権利をもつ。自分自身の決定を自由にする。自分独自のやり方で行動できる。

B (博愛)：他の人々のためになることをする。共に分けあい不幸な人々に助力の手をさしのべ、寛大である。

L (指導)：他の人々の行動に責任をもつ。他の人々の上に立つ。リーダーとしての位置につく。

結 果

1 年代の異なる学生間の比較

表1は、1971年に調査した志望専攻グループ別の SIV 平均得点と標準偏差値である。食物栄養のみ2年次生を含むが他はすべて1年次生である。表2は1985年の調査結果の一覧である。いずれも1年次生のデータである。1971年と1985年の比較を行ない、同一学科・専攻同志の間で平均値に有意差のみられるものには、表2の中に*印で示した。

まず、全体的傾向は合計の平均値を比較することでとらえることができる。有意差のある価値領域は、S (支持)、R (承認)、I (独立) の3つである。1971年の学生に比べると現代の学生は、支持価値と承認価値をより高く評価するようになり、独立価値は低くみるようになってきている。

さらに、学科・専攻別にみると次のような変化がみられる。

- ① 家政：現代学生の方が、独立価値を以前の学生よりも低く評価している。
- ② 食物栄養：現代学生の方が、支持と承認価値をより高く評価し、同調価値を低く評価している。
- ③ 保育：現代学生の方が、支持価値と承認価値をより重視し、独立価値は重視しなくなっている。
- ④ 英文：現代学生の方が、支持価値を高くみている。
- ⑤ 音楽：1971年と1981年の間には、どの価値領域にも有意差は認められない。

表1 1971年の学生の専攻別 SIV 得点平均値および標準偏差値

学科・専攻	n	M & SD	S (支持)	C (同調)	R (承認)	I (独立)	B (博愛)	L (指導)
家 政	34	M SD	16.09 4.69	18.24 4.41	9.59 3.59	16.91 5.76	17.03 5.45	12.15 3.82
食 物 栄 養	105	M SD	16.42 3.90	18.31 4.79	9.16 3.26	17.06 4.97	17.50 4.63	11.36 4.05
保 育	75	M SD	16.49 3.99	17.57 3.92	8.43 3.11	17.11 4.70	19.33 4.16	11.07 3.74
英 文	24	M SD	15.92 4.55	17.96 4.35	9.54 3.88	16.54 4.96	18.88 5.37	11.17 3.58
音 楽	54	M SD	16.09 4.24	18.43 4.10	9.81 3.64	17.19 6.11	17.33 5.23	11.15 4.42
合 計	292	M SD	16.30 4.14	18.11 4.37	9.17 3.44	17.03 5.25	18.00 4.87	11.32 4.00

〔注〕 食物栄養のみ2年次生が含まれる。

表2 1985年の学生の専攻別 SIV 得点平均値および標準偏差値

学科・専攻	n	M & SD	S(支持)	C(同調)	R(承認)	I(独立)	B(博愛)	L(指導)
家 政	47	M	16.77	18.60	10.70	13.40 **	18.87	11.66
		SD	4.59	4.42	3.68	5.09	5.98	3.95
食 物 栄 養	80	M	18.89 ***	16.66 *	11.16 *	16.20	16.33	10.76
		SD	4.13	3.95	3.96	5.32	6.03	4.33
保 育	94	M	17.74 *	17.28	10.91 ***	13.90 ***	19.24	10.91
		SD	3.88	3.15	3.41	4.57	5.13	4.25
英 文	42	M	18.31 *	17.60	10.76	15.69	17.60	10.05
		SD	3.80	4.58	4.10	5.51	5.25	4.20
音 楽	31	M	17.00	18.06	8.94	18.77	16.29	10.94
		SD	5.36	5.03	2.96	5.68	5.33	4.08
合 計	294	M	17.90 ***	17.45	10.72 ***	15.22 ***	17.84	10.87
		SD	4.31	4.07	3.72	5.38	5.72	4.22

〔注〕 *印は1971年(表1)との同学科・専攻間の比較で有意差のあるものを示す。

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

2 保育科学生にみられる年代差

保育科学生については、上記の1年次生のデータの他に2年次生のデータがあるので、これを加えて比較検討を行なった。

表3にみられるように、L(指導)を除くすべての価値領域に有意差が認められた。昭和59年度生と昭和60年度生の合計を現代学生とし、昭和46年度生と昭和47年度生の合計を以前の学生とすると、現代学生の方が以前の学生よりも、支持および承認を重要視するようになり、相対的に同調、独立および博愛を重視しなくなったといえる。

3 志望専攻別の特徴

1971年と1985年のそれぞれの年代ごとに、志望専攻別のSIV平均得点を比較した。

まず、1971年の資料では有意差のみられる価値領域は少なく、⑦保育科においてB(博愛)が高いこと(家政、食物栄養、音楽との間に有意差がある)、④音楽科でR(承認)が高いこと(保育との間に有意差がある)だけに限定されていた。

ところが、1985年の資料では、L(指導)を除くすべての価値領域に有意差のみられるのである。表4は先の表2を少し変形して学科・専攻別にSIV平均得点の有意差を一覧したものである。各志望専攻グループ別に他の専攻グループと比較して主要な差のある価値領域をみてゆくと次のような結果がみられる。

- (1) 家政専攻では、C(同調)とB(博愛)とが高く、S(支持)とI(独立)とが低い。
- (2) 食物栄養専攻では、S(支持)とR(承認)とが高く、C(同調)とB(博愛)とが低い。
- (3) 保育科では、B(博愛)が高く、I(独立)が低い。
- (4) 英文科では、顕著な差はないが、S(支持)とI(独立)が高い傾向がある。
- (5) 音楽科では、I(独立)が高く、R(承認)が低い。

表3 保育科学生の入学年度別 SIV 得点と差の検定

入学年度・人数		S(支持)	C(同調)	R(承認)	I(独立)	B(博愛)	L(指導)
昭和46年度生および 昭和47年度生合計 n=159	M	15.70	18.35	8.31	16.30	20.80	11.37
	SD	4.11	4.15	3.34	4.85	3.98	4.30
昭和59年度生および 昭和60年度生合計 n=207	M	18.59	16.31	10.99	14.59	18.77	10.75
	SD	4.03	3.92	3.41	4.80	5.16	4.05
平均値の差 有意水準 ($d f = 364$)		2.89 0.001	2.04 0.001	2.68 0.001	1.71 0.001	2.03 0.001	0.62 ns

表4 現代学生の学科・専攻別 SIV 平均得点の有意差

価値領域と有意差	家政	食物栄養	保育	英文	音楽
S(支持) 平均値 有意差のある科・専攻	16.77 食**	18.89 家**音*	17.74	18.31	17.00 食**
C(同調) 平均値 有意差のある科・専攻	18.60 食*保*	16.66 家*	17.28 家*	17.60	18.06
R(承認) 平均値 有意差のある科・専攻	10.70 音*	11.16 音**	10.91 音**	10.76 音*	8.94 家*食** 保**英*
I(独立) 平均値 有意差のある科・専攻	13.40 食**英*音***	16.20 家**保**音*	13.90 食**英*音***	15.69 家*保*音*	18.77 家***食* 保***英*
B(博愛) 平均値 有意差のある科・専攻	18.87 食*	16.33 家*保***	19.24 食***音**	17.60	16.29 保**

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

考 察

対人関係価値尺度では、人間行動の基礎的動機づけの型としての価値をとりあつかう。人とのつきあいの中で重視している考え方をとらえることによって、パーソナリティを理解しようとするものであり、学生気質を検討する上でも適切な資料となる。十数年前の学生と現代の学生との比較から次のようなことが考えられる。

全体的傾向として、現代学生が高く評価するようになった価値領域はS(支持)とR(承認)であった。S(支持)は、「私のことをよく知って、力になってほしい。自分の味方になって親切にしてほしい」ということであり、R(承認)は、「みんな私の方に注目してほしい。ほめてもらいたい」というものである。そして、低く評価するようになったものはI(独立)である。これは「自分のことは自分で

決めたい。自分独自の行動をとりたい」と考えるものである。つまり、現代学生は対人関係において独立的ではなく、他人からの支持を求め、多くの人の注目を集めたいという傾向が強まっているといえるようである。すなわち、他人指向的な甘えの気持が強くなっているといえるのではなからうか。

このような傾向はどの専攻の学生グループにも多少とも見られるが、典型的にあらわれているのが保育科である。そこで、2年次生の資料を加えて少し詳しく検討した。この結果、全体の傾向と一致し、さらにそれ以上の価値領域に変化を見出したのである。すなわち、現代学生は以前の学生よりも、S（支持）とR（承認）の平均得点が高くなり、C（同調）とI（独立）およびB（博愛）の得点は低くなっているのである。これは他人から親切にされ、人の注目を集める方向への関心は高くなったが、他人に合わせたり、独自の振るまうこと、さらに他人に親切にしてあげることが重視しなくなったということである。少し表現を変えると、他人に親切にしてあげるよりも自分が親切にされたい方で、独立的には行動できないが人に同調する方でもない、それでいて目立ちたいという傾向が強くなっているのである。一口にいえば幼稚化の傾向といえよう。

さて、志望専攻別に比較した結果から考えられることは以下のようなことである。

1971年当時の学生の方では、保育学生グループが他のグループよりB（博愛）が高いことが目につく程度であったが、現代学生の方ではかなりの価値領域にグループ間の差がみられるようになった。

まず、保育学生ではB（博愛）が他科学生よりも高いことは以前の学生と同じ傾向であるが、I（独立）が低くなっている。不幸な人々に助力の手をさしのべ、みんなに親切にすることという奉仕的な気持は強いが、自分の思うまま自由に行動することは他科グループよりも重視しないのである。なお、現代学生のグループの中ではB（博愛）が最も高いのであるが、1971年調査当時の保育学生グループと比較すると上記のように低くなっているのである。以前のように希望すればほとんど全員が保育・教育の場に就職できていた状況からくらべて、厳しくなっている現状を反映しているのであろうか。

次に、家政専攻の学生グループは他のグループより、みんなに受け入れられる妥当な行動をし（同調）、他の人々のためになることをすること（博愛）を重くみているが、他の人から勇気づけられたり（支持）、自分独自のやり方で行動すること（独立）は重視していない。保育グループに似た傾向がある。

食物栄養専攻では、他の人々から理解され（支持）、認められること（承認）を重視しているが、社会的に当を得た行動をしたり（同調）、みんなに親切にすること（博愛）は相対的に低くみている。

音楽科では、自分独自のやり方で行動できる（独立）ことを高く評価し、人から重要な人物として認められること（承認）は低く評価しているのである。これは他のグループよりおとな的であるといえよう。また、音楽科では1971年の調査と今回のものとに全く有意差が認められないことも特徴である。

英文科は平均的で特徴がとらえにくいだが、比較的自分自身の決定を自由にすること（独立）を高くみる方であり、他の人々から思いやりをもって扱われること（支持）もやや高くみる傾向がある。

以上いくつかの観点から、現代学生の対人関係価値に現われた特徴をみてきたのであるが、総体的には昨年報告した、性格の外向タイプの増加と、個人的なゆとりを求めるライフスタイルへの移行という

傾向に整合する結果が得られたと考えられる。

そして、志望専攻別にみると、学生の考え方は以前より分化してそれぞれのグループの特徴がかなりはっきりしてきたと感じられる。高校の進路指導での方向づけに一定の傾向があるのか、あるいは進路への目的意識が明確化してきたことのあらわれであろうか。

しかし、全体的な傾向としては、おとなになり切れない甘さと幼なさの感じられる変化がみられてきているのは確かである。

日頃大学生と接する私達にとっては、こうした学生の要求の多様化傾向や幼稚化傾向をふまえて指導にあたる必要を感じる。たとえば、カリキュラムの内容や講義の1時間半という時間枠や授業方法にも工夫をこらすことが課題であろう。さらには、生活指導、クラブ活動の指導、就職指導、相談活動などにも常に変化する学生気質を考慮に入れて対処することが要求される。

[付記] 本研究の一部は、1985年11月開催の全国保母養成協議会第24回研究大会において口頭発表した。

文 献

- 平松芳樹 1972 志望専攻別対人関係価値の比較研究—短大生の場合—, 中国短期大学紀要, 3, 33-40
平松芳樹 1973 保育科学生における対人関係価値の発達的特質, 中国短期大学紀要, 4, 29-32
平松芳樹 1985 現代学生の性格傾向とライフスタイル—時代差および志望専攻別特徴の検討—, 中国短期大学紀要, 16, 62-69